



菅田 ひかり (ささだ ひかり)

- ①職業: 産婦人科医
- ②出身地: 徳島県
- ③略歴: 2018年度 医学部医学科卒
2018-2020年 徳島赤十字病院で研修医
2020-2021年 徳島大学産婦人科に入局
2021年4月～ 四国中央病院で勤務
- ④趣味: ライブに行くこと

在学中、研修医について

医師は、大学で6年勉強し国家

暖かく晴れた春の日でした。祖母と私は散歩していました。そのとき、私は3歳でした。公園を歩いていると、空に飛行機が見え、祖母に飛行機の行く方向を聞きました。祖母は「あの飛行機は日本に行くのよ」と言いました。私はいつか家族と一緒に日本に行く、と祖母に言いました。これは私にとって、とても大切な思い出です。幼い頃から、日本が私の人生の一部になることを知っていたのです。私は2018年、文部科学省国費外国人留学生奨学金の受給者選ばれ、徳島大学に留学しました。人生の新しい章を始めることに、とても興奮しました。徳島大学はモンゴル国立医科大学

(MNUMS)と長い交流があります。昨年には、モンゴルの人々のための医療サービスとして、徳島大学との連携のもと、最初の大病院が日本の助成金の支援を受けて開設されました。そのため、文部科学省の奨学金を受けて徳島大学に留学できたことを、光栄に思っています。徳島での生活と勉強を一言で言えば、「エキサイティングな旅」です。新しい場所、食べ物、人が私にとっては新しく、魅力的で、興奮を誘うものでした。毎日がまさに「エキサイティング」でした。一方で、文化の違い、言語の壁、未知の課題など、いくつか

の困難にも直面しました。そこで、私は自分自身を「更新」し、よりグレードアップした人になるための旅を始めました。すべての挑戦は自分を成長させる機会になりました。失敗から学び、最善を尽くすようにしました。徳島大学に留学している間、ほかでは得られない人生の教訓をたくさん学びました。困難な時期を乗り越え、成長した人になるためにサポートくださった先生方、友だち、同僚に心から感謝しています。卒業後は、徳島で得た新しい経験と新鮮な知識をもとに、モンゴルで働きたいと思っています。私が学んだことを共有し、周りの人

実習で採血の練習をしている様子



休みの日はライブで気分転換。最近行けていませんが...



産婦人科で使うエコー(超音波診断装置)

先輩に続け 「苦手意識を超えて」

仕事について

私はこの4月から、愛媛県にある四国中央病院で産婦人科医として働いています。四国中央市は、四国4県のちょうど境目に位置する人口約8・4万人の小さな市です。人口数はそんなに多くありませんが、周囲に分娩できる施設が限られるためか、年間300例、だいたい1日に1件程度の分娩があります。

産婦人科医の仕事として、分娩の他に婦人科がん検診や不妊治療、生理痛や生理周期の異常の治療、閉経後の骨粗鬆症の診療などもしています。すべての年代の女性に寄り添い、健やかに毎日過ごせるようお手伝いするのが私の仕事ですが、産婦人科は入りにくいのか、妊婦さん以外の若い女性が受診することは少ないです。皆さん、ぜひ検診は受けてくださいね。

試験に合格した後、2年間の研修医(医師免許がありますが、ほぼすべての科を勉強する見習いの時期です。)期間を経て、3年目に自分の専門となる科を決めることとなります。私は当初、小児科医を志して大学に入学しました。5年生で病棟実習が始まるまで小児科以外の科にあまり興味はなく、分娩の流れや女性ホルモンと月経周期の関りのイメージが掴みにくかったため、産婦人科はどちらかというと少し苦手意識がありました。ところが、病棟実習でその考えは一変しました。実習の初めに回った産婦人科がとても肌合っていて、分かりにくかった分娩も実際のお産を見ることでイメージが掴め、俄然産婦人科医に対しての興味がわいてきました。その後研修医の期間中は、小児科医になるか産婦人科医になるかで凄く悩みましたが、自分が手を動かすことの方が向いていると考えたこともあり、産婦人科になることを決めました。

実習では、苦手な分野でも必ず関わらなくては行けませんでしたが、そのおかげで選択肢の幅が広がりました。好きなことを追求するのもちろん良いですが、苦手だと感じるこの中こそ、自分の可能性を広げられる経験があるのだなと感じました。

メッセージ

後輩の皆さんには、少し苦手意識を持つている事でも、それに関わるチャンスがある場合は尻込みせずにトライしてみたいと思います。自分のやりたいこと、実は自分に合っている事がどこに転がっているかは分かりません。挑戦した事がやっぱり苦手だったと

感じることもあると思いますが、それは逆に自分の得意分野を伸ばすきっかけとなったり、苦手なことに対しての自分なりの対処法を見つけるきっかけとなったりすると思います。短いようで短い学生生活、ぜひ様々なことに挑戦して、自分でも知らなかった自分を見つけてみてください。

My Life in Tokushima

「いつか家族と一緒に日本に行きます」

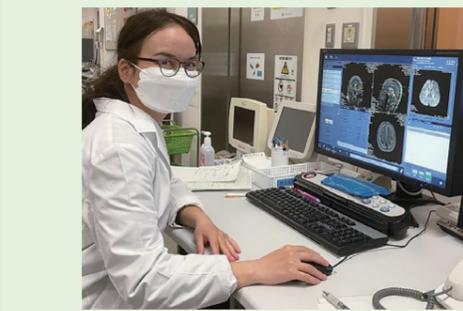
大学院医科学教育部 博士課程 4年
Gonchigsuren Oyundari
(ゴンチグスレン オユンダリ) [モンゴル]



留学生 滞在記



第80回日本放射線学会年次総会での口頭発表



最新のMRI装置操作方法を学習中



放射線科および放射線腫瘍学部門とのバーベキューパーティー(筆者:前列左から2人目)

暖かく晴れた春の日でした。祖母と私は散歩していました。そのとき、私は3歳でした。公園を歩いていると、空に飛行機が見え、祖母に飛行機の行く方向を聞きました。祖母は「あの飛行機は日本に行くのよ」と言いました。私はいつか家族と一緒に日本に行く、と祖母に言いました。これは私にとって、とても大切な思い出です。幼い頃から、日本が私の人生の一部になることを知っていたのです。私は2018年、文部科学省国費外国人留学生奨学金の受給者選ばれ、徳島大学に留学しました。人生の新しい章を始めることに、とても興奮しました。徳島大学はモンゴル国立医科大学

の困難にも直面しました。そこで、私は自分自身を「更新」し、よりグレードアップした人になるための旅を始めました。すべての挑戦は自分を成長させる機会になりました。失敗から学び、最善を尽くすようにしました。徳島大学に留学している間、ほかでは得られない人生の教訓をたくさん学びました。困難な時期を乗り越え、成長した人になるためにサポートくださった先生方、友だち、同僚に心から感謝しています。卒業後は、徳島で得た新しい経験と新鮮な知識をもとに、モンゴルで働きたいと思っています。私が学んだことを共有し、周りの人